

第2回石川国体(1947)に関する研究(その3) —市民が目にした国体都市金沢の風景—

A study of the 2nd Japan national sports meeting in Ishikawa, 1947 (3)
—Landscapes of sports meeting from the citizens' viewpoint in Kanazawa—

大久保 英 哲 (金沢星稜大学女子短期大学部学長・スポーツ学科特任教授)

Hideaki OKUBO (President, Kanazawa Seiryo University Women's Junior College)
(Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Specially-appointed Professor)

〈要旨〉

1946年に始まった「国民体育大会」は、戦後始められたスポーツ大会の中では最も長い歴史を持つ。だがこの大会も2023年佐賀県で行われる第78回大会から「国民スポーツ大会」と改称される。名称変更を機に、おそらく大会の開催目的や内容にも修正が加えられ、新たなスポーツ競技大会としての歩みを始めることになるであろう。そこで、これまでの「国民体育大会」を総括して、その歴史的評価を加えたい。本論文はその一助として、石川県で行われた1947年の国民体育大会を取り上げ、その実態を明らかにしつつ、歴史的な位置づけを行う。本稿は、敗戦直後の混乱期、この大会が金沢市民にとってどう映ったのか、どのような意義を持つ大会だったのか、を当時の新聞記事、国体報告書等から明らかにする。

〈キーワード〉

国民体育大会、第2回大会、1947年、金沢市、石川県

はじめに

1947年、第2回国民体育大会が金沢市を中心に石川県内で開催された。前年11月、大日本体育協会は戦災を免れた京都を中心とする関西地区で第1回国民体育大会を開催したが、第2回大会開催については目算すら立っていなかった。その時、金沢市・石川県は積極的に招致に手を挙げた。当時の武谷甚太郎金沢市長は、議会答弁で「金沢は戦災に遭わなかった都市として、日本民族全体が再生していくことに貢献すべきなのではないか。苦しい生活の中からも国家再建の芽を育てることができるのではないか。そのため方法があるならば、市は最善を尽くしたい」旨発言し、金沢城内旧第9師団司令部並びに旧歩兵第7聯隊の跡地に総合運動場に転用する方針を示して、金沢を軍都から文化都市へと転換すべく国体招致に取り組んだ。敗戦直後で混乱が続く県内に数万人の人々が訪れては、県内の食糧事情が悪化する。「生か死か、国体金沢開催反対」という反対運動も激しかったが、参加選手役員全員が米、味噌、醤油、塩持参を義務付けたことと、北陸早場米の豊作によって、これは結果的に杞憂に終わった。

この石川国体は、1947年10月30日から11月3日まで、金

沢を中心とする県内に全国から1万2千名の選手を集め、日本スポーツ史上に「その功績は大きかった」と記録される大成功を収めた。地方各府県の持ち回り開催、天皇陛下の開会式臨場、国旗・国歌の斉唱、聖火マークの大会シンボルマーク、スポーツの歌「若い力」の制定など、国体の基本モデルとなり、現在に至っている。

この間、金沢駅や各競技会場は、戦争を終えて全国から集まった選手役員たちの再会の場となった。旧知の友人を見かけては駆け寄り、抱き合って消息をたずね、戦死した旧友のことを聞いて涙し、この時、誰からともなく、「世直しをしよう」「一日も早く祖国の復興をはかろう」と固く誓い合ったといわれる。後年、この石川国体は「世直し国体」とよばれるようになった。

金沢城内に総合運動場を建設する案こそ実現しなかった(代わって1949～1992年まで金沢大学が置かれた)が、この国体開催に合わせて、金沢城周辺や市内各地には多くのスポーツ施設が整備され、国体都市に変貌した(表参照)。戦災に遭わず、社会資本が生き残った今から70年前の1947年当時の金沢はどのような姿だったのだろうか。

主な資料は、何といても大会報告書と大会写真帳であ

るが、ここではこれまであまり取り上げられてこなかった、金沢市民の目に映った国体を明らかにするために、北國毎日新聞に報じられた記事や金沢の産業界が作成した国体案内等もくわえて、その内容を検討してみたい。

(1) 国体開催最終決定と反対運動

1947年7月1日、第2回国民体育大会石川県開催の会場視察のため来県した清瀬日本体育協会理事は、金沢、小松、七尾、大聖寺の各施設を回るとともに、大会に反対を表明している「国民体育大会延期期成同盟」八日市屋清太郎代表とも面会し、反対が県民の総意であれば止めるのにやぶさかではないとしながらも、3日間の視察の上最終決定するとした。一方、総同盟石川県連や社会党石川県連は、一般県民が懸念している食糧や一般物資のやみ値吊り上げなどに当局が防止策を講ずるならば、反対せずの態度を打ち出し、共産党地方委員会でも、原則的な反対は崩さないまでも、すでに開催の線で準備が進められており、反対のための反対はしないとの意向を表明していた。

また同記事では、宮崎国体事務局次長の次の趣旨の弁明を掲載している。

「仮に、秋の大会に2万人が参加するとしても、主食はもとより、みそ、しょうゆなどの調味料も持参するよう通知済みであり、石川県のコメを食いつぶして餓死者が出るのではないかなどというのは全く杞憂である。昨年の大会で京都が全国一の物価高になったという第2の反対理由にも全く根拠はない。そもそも3種目、せいぜい1500人の参加者のためにインフレが高進することなどありえない。仮に、石川に10倍余りの人出があるとしても、主食持参であるからインフレ高進の要素はない。また土盛り工事が主で、資材はほとんど使用しないので、これほど大規模な失業対策事業はない。そのうえ施設は恒久的に使用できるので、スポーツ奨励と県民の厚生に役立つので一石三鳥である。結局大会開催で失う所は一つもない。一部の人たちが世論を代表したごとく振舞って延期を画策するのは人心を惑わすものとみるほかない」⁽¹⁾。

なお、この国体反対運動については、拙稿「第二回国民体育大会（1947年石川国体）に関する研究(1)」⁽²⁾参照のこと。

翌7月2日、清瀬理事長は県下の施設視察で、松任プールへ向かった。ここに先回りしていた大会延期期成同盟のトラックから流れる大会反対マイクを聞きながら、「彼らの反対の声は取るに足らないが、宿舎などの面で無理しすぎないように」と大会関係者へ声をかけている⁽³⁾。

こうして7月4日の紙面には「国民体育大会本決まり」と報じられ、また同日から「大会に寄す」とした関係者による大会コラムの連載が始まった。大会への意気込みや期

待、展望などを紹介する記事であった。第1回目は田畑日本水泳連盟理事長による「水泳世界の日本へ」と題する水泳競技復興への談話であった。

同日、「スポーツ欄」には四高・八高定期戦（庭球、バスケ、バレーボール、野球、水泳）が4日から3日間金沢で行われること、八高北上軍が4日午後5時20分到着、金沢駅前で両校のエール交換が行われる旨報じられている。また四高・三高バレーボール定期戦が四高で開催され、四高が勝利したことなども報じられている⁽⁴⁾。学制改革以前、石川国体を支える基盤となっていたのは、旧制高校や師範学校、高等女学校、中学校などの学校スポーツ活動だったのである。

(2) 天皇行幸関連記事

石川国体開催正式決定を受け、大日本体育協会がスポーツ振興に拍車をかけ、地元民衆の要望に応えるため、天皇陛下のお成りを宮内庁に要請したところ、石川・富山・福井への行幸がほぼ確定したことが1947年7月18日に報じられた。同時に、この日、石川食糧事務所は県内の米不足を緩和するとして、山形・秋田県から米それぞれ500トン、栃木県から麦1万石を移送することとなったと発表した。同日、北陸線糸魚川駅から鉄道機関員によって石炭車に積み込まれたと思われるヤミ米が摘発されたこと、元駅長がヤミ卵200個を買って帰る途中、摘発されたことが報じられている⁽⁵⁾。

7月31日には「自動車による闇物資輸送 県境に検問所」との見出しで、大聖寺、倶利伽羅方面に検問所を設置。停止命令に応じない場合には、タイヤをねらってピストルを発射するとの警告記事が報じられている⁽⁶⁾。市民も鉄道員も駅長ですら、米などの食糧確保に必死であり、国体反対運動も一定の支持を得たとみられるだけに、県内米不足の緩和対策は急務だったのであろう。当時の食糧事情の深刻さがしのばれよう。

(3) 労働団体の国体マスゲーム参加案

1947年7月11日、金沢市白銀町の労働会館で石川労働理事長、国鉄労組県連部運動部長、北鉄、県農会、日通、国立金沢病院の代表者らが集まり、石川国体を盛り上げるため、労働団体から5千人の集団演技出場案が議論されたが、正式決定には至らなかったと報じられている。こうした石川県下労働団体の動きに、日本体育会森田学生部長は、「日本のスポーツは従来の選手中心路線から、レクリエーションを盛んにしたい。スポーツのそのような方向性や大衆化は、勤労者の参加によってはじめて強力となり、厳正に推進される」として、歓迎の意向を述べている⁽⁷⁾。

（4）各種スポーツ講習会

1947年7月26日、金沢、小松、七尾各市で18種目のスポーツ講習会参加者募集が開始された。参加資格は一般男女、学生であり、参加費は1種目につき30円であった。ハンドボール（四高）8月1日から相撲（七尾）、重量挙げ（四高）、馬術（三中）、自転車（市立工業または小將町中学校）、軟式庭球（二高女）等であった⁽⁸⁾。8月2日には重量挙げ、ハンドボールの講習が始まったこと、ハンドボールが女子にも参加可能なことなどが、紹介されている⁽⁹⁾。

また7月31日には「関西から200名」の夏季大会申し込みなどが相次いでいること、石川県の水泳選手代表候補80名が選出されたことが報じられた⁽¹⁰⁾。

（5）その他社会面記事

①金沢駅改修

7月26日には、石川国体と天皇陛下の行幸を機に、駅舎、駅長室、便所などを改修して、「観光金沢玄関の改造」に取り組もうとしていると報じられている。

②結核死亡率の改善

また同日、結核全国一だった石川県が23位に改善されたことを「ありがたい転落」として報じられた⁽¹¹⁾。

③敗戦処理と戦後の再建

8月3日、「明日東京裁判再開 いよいよ4日に東條被告も証人台に立つ」と報じられ、また金沢城のあとに真宗大谷派が「北国大学」を設立したいとの意向が表明され、柴野知事は「総合大学構想と衝突するため、できるなら協調を」と呼び掛けている⁽¹²⁾。

敗戦処理と戦後復興に向けた再建案の調整が課題になっていることがわかる。

（6）夏季国体関連

①プールの完成

8月15日には水泳大会役員選手が決定されたことが報じられ、「全国民が泳ぎに泳げ 迫る夏季大会に大記録期待」とする紙上座談会も開かれている。また松任プールが完成し14日から16日の午前中にかけて、地下60mからの地下水をくみ上げて満水にする予定であると報じられている⁽¹³⁾。8月18日には夏季大会スケジュールが発表され、17度の冷水にも関わらず、満水になったプールに次々に飛び込む、猛練習を開始した選手たちの姿が伝えられている。「女子選手の水泳着がだぶだぶでいかに物資不足のご時世とはいえ、あまりにもお粗末であり、あれでは実力を十分発揮できるかどうか気の毒であるが、そんなことなど眼中にな

く、力泳又力泳する姿は全く頼もしい」と報じられている⁽¹⁴⁾。

②明日から国民体育大会水上大会

8月22日からの国体夏季大会を前に各県選手団は次々と来県。金沢に降り立った選手団やこれを迎える地元の人々の様子は次のように報じられている。

1都1道2府9県（大分、宮崎不参加、鹿児島棄権）1059名、役員158名が参加する夏季大会を明日に控え、「俳句の千代女の生まれた町から水泳日本再建の出発点となるプールのある町として全日本に知られた松任駅前には大歓迎門がたてられ、遠来の水の選士を迎える喜びを表している。一方大会場を控える金沢市の商店街も店々に大会を祝う旗飾りを下げ、ポスターを張り、大会一色に塗りつぶされた。

金沢に着いての第一印象は「戦争で焼けていなくてうらやましい」とどの選手も言う。

重そうなりュックを背負うのがお米どころの新潟選手、秋田の選手はしょうゆ樽を2本ぶらさげてきたとか。千葉の選手も肩の荷物が重そうだったとか、案内所職員の眼光は鋭い⁽¹⁵⁾。

③第2回国民体育大会夏季大会開幕

8月23日には夏季大会の開幕が報じられ、連日熱戦の様子が報じられている⁽¹⁶⁾。なお、国体報告書によれば、8月22日の開会式では、選手入場、開会宣言、大会旗掲揚、末弘巖太郎大会会長による会長挨拶に続いて、来賓による祝辞が述べられている。その順序はGHQ石川軍政隊長ギーボルド中佐、森戸辰男文部大臣、柴野和喜夫石川県知事であった⁽¹⁷⁾。国旗掲揚、国歌斉唱はなかった。このようにして8月25日には「熱闘3日93の新記録生む」「感激の幕閉づ」といづれもトップ記事の扱いで報じられた⁽¹⁸⁾。

（7）秋季国体準備進む

9月6日四高グラウンドにおいて「国体に備えたラグビー講習」が行われ、またこの日、国体軟式野球場になっている金沢市立工業高校グラウンドに、バックネット、スタンドも完成、慶応大学生を迎えて、地元チームとの対抗戦が行われると報じられている⁽¹⁹⁾。

10月13日、県庁裏（現在宮守堀）に国体テニスコートが完成、12日これに先立って金沢ローンテニスクラブと四高庭球部がコート開きを行った⁽²⁰⁾。またこれに先立って、9月29日に文化・スポーツ団体は、金沢城を公園化し、合わせてレクリエーション運動場とする構想を打ち出している⁽²¹⁾。金沢城の跡地利用は市民の大きな関心事であったことがわかる。

10月19日には、国鉄から、国民体育大会用臨時ダイヤが発表され⁶²⁾、10月21日には、金沢医科大庭球部OBの種村龍夫が「スポーツと医学」、帝国生命金沢支店長で慶應大学ラグビー部OBの神藤徳一が「社会生活とスポーツ」などのスポーツコラム記事を掲載している⁶³⁾。10月22日には、NHK金沢放送局が5日間国体全国中継放送をすると報じられ⁶⁴⁾、10月26日には、ボクシング・リングが完成したと報じられている⁶⁵⁾。

(8) 天皇北陸巡行と国体臨場

10月17日、定例県議会において、知事から天皇奉迎65万円余りの追加予算提案がなされ⁶⁶⁾、20日には「天皇陛下御来県日程、3日間」の行幸日程が発表された⁶⁷⁾。24日には「陛下お迎えの県民心得」と題する記事が掲げられた。それによれば、「人間となった天皇」をお迎えするのであるから、「親しみの心でお迎えすることを」基本とし、国旗は掲げない。またモーニングやフロックコートなどは着用には及ばない。写真撮影は自由、学校単位などでの引率・整列などは自由だが、立礼でよい。花火や提灯行列などは事前に届け出ること。基本的にありのままで良いというものであった⁶⁸⁾。10月24日、金沢市内の店頭で女優さんのプロマイドと並んで天皇の写真が飾られ、「ああ陛下が！」と人々をびっくりさせたとの記事も掲載されている⁶⁹⁾。旧憲法の現人神から人間宣言を経て、新憲法下で象徴となった天皇をどう迎えたらいのか、県民の戸惑う様子が示されているといえよう。

10月24日には「天皇陛下は23日午前7時35分、東京駅発宮廷列車で出発、米原まで出迎えた福井県知事とともに、午後5時6分敦賀駅に到着」と写真入りで報じられている⁷⁰⁾。

10月25日には、「いよいよ明日午後1時半、大聖寺駅着列車で石川県入り」「3日間にわたって19か所の産業視察」とトップ記事で報じられている⁷¹⁾。

10月26日には「陛下きょう御来県 大正13年摂政宮として来県されて以来、23年ぶり」と報じている。北國毎日新聞も社説「われらの天皇」で、「国家が亡国に瀕して、国民と天皇が初めてしっかりと結びついた」とし、国民体育大会に光を添えられると歓迎した⁷²⁾。

10月27日には、大同工業、橋立、国立山中病院を視察、山中温泉の宿舎に入ったこと、大聖寺から橋立に向かう道筋には奉迎者の群れが万歳の声で歓呼したこと、宿舎の前は3千人の町民が提灯をもって出迎え、熱狂的に歓迎したことなどが報じられている⁷³⁾。

以後、天皇の動向と県民の熱狂的な歓迎記事は連日トップ記事として報じられている。

10月28日には山中温泉で休養中にもかかわらず、「ひょ

うひょうと陛下 雨の山峡を一里 雑草にも目を注がれる生物学者の目」と大きく報道している⁷⁴⁾。同日の記事「国民体育大会 選手ら乗り込む 北と南から第一陣、千八百余名」では九州7県（長崎、大分、鹿児島、熊本、福岡、佐賀、宮崎）の選手千四百余名をのせた団体特別列車が、佐賀県から一昼夜走り続けて、27日午前4時20分金沢に到着。1週間分の食料と毛布を詰め込んだリュックやトランクも重そうだが、南国の選手たちには北国の風は冷たく、さすがにオーバーの襟を立てていたと報じられている。このほか北海道からの臨時列車も到着、市街地は大会気分がみなぎっていると報じられている⁷⁵⁾が、その扱いは天皇関連記事に比べればはるかに小さかった。

10月29日天皇は、山中から金沢を経て和倉に向かった。金沢市の県庁前奉迎場では、井村金沢市長の発声による「天皇陛下万歳」と金城高等女学校のブラスバンド部による「君が代」の演奏に2万人の市民が涙し、詰めかけた民衆の万歳の歓呼に応じて、県庁2階知事室から、「天皇が3度も姿を見せられた」と報じられている⁷⁶⁾。なお、「君が代」は従来国体開会式で歌われたのは記録されているが、前日に県庁前でも歌われていたことになる。

金沢市内は順路の両側とも人垣で埋められ、押し寄せる波のように万歳が繰り返された。宿舎の和倉温泉では、夜、付近の漁民が七尾湾に数十隻の船を浮かべ、火を焚き、太鼓をたたいて催す万灯太鼓船で歓迎している⁷⁷⁾。

翌日の10月30日の新聞には、金沢に戻られた陛下を、2万人が高張提灯、赤提灯、行灯提灯など色とりどりの提灯を手に23万市民の感激を伝えるかのごとく、宿舎の成巽閣に向かったとある。またブラスバンドが「若い力」「金沢市歌」を吹奏する中、万歳万歳の声がいつの間にか、「君が代」に代わり、「天皇が2度3度とお答えになった」と熱狂的な天皇歓迎ぶりが報じられている⁷⁸⁾。

また国体開会式後、天皇は兼六園球場で金沢三中对仙台中の試合を観覧して、午後12時5分金沢駅発宮廷列車で富山県へ向かった。車中高岡まで見送った柴野知事に「みんなが歓迎してくれてうれしかった。諸施設にはできるだけ援助を与えてもらいたい。県の発展を祈る」との言葉を残して、去った⁷⁹⁾。

(9) 国体の報道

①開催前日

10月29日、北國毎日新聞は国体開催前日の模様を次のように伝える。

「既に大会気分町にみなぎり、日本のすみずみから踵を接して来場する選手団で、金沢の街は明日に迫った国体気分に入りきっている。鹿児島県から北海道まで色とりどりの腕章をまいた若者たちの日焼けした顔がお国なまりの声



石川国体開会式（北國毎日新聞 昭和22年10月31日）

をはりあげているのもたのもしい風景のひとつ。かつては世界のすみずみにスポーツ日本の名をあげた人たちも若い選手たちと一緒に県下各地の競技場で、コーチに練習に余念がない。ヨット、レスリング、ボクシング、重量挙げ、ホッケー、公開ゲームのフェンシングなど北国にはなじみのない各種スポーツも明日からの大会がもたらすファンへのうれしい贈り物であろう。街にはオートバイが、自動車が小旗を翻して疾駆している。国体報道戦は既に開始された。新聞記者の活躍だ。兼六園下の国体準備委員会事務局は今火事場のような大混雑ぶりである。つぎからつぎへと到着する選手団の応対だけでも血走った目とかすれた声にごったがえされている。10か月間の準備まったくOK。第2回国体秋季大会は明日けんらんの幕を開く」⁴⁰⁾

②国体当日

10月31日付の報道は国体開会式の記事で埋め尽くされて

いた。その見出しは「陛下を迎えて第2回国民体育大会秋季大会開く」「きのう秋晴れのもと全国の若人1万2千名参加して金沢運動場空前の開会式典」と、天皇臨場が大きなインパクトを与えていることがわかる。この日の陛下について、「場外は築く人垣から上がる万歳の嵐。城内には目にしみる大きな日の丸の国旗がセンターポール高く翻っている。お車が着く。一瞬城内はしんとする。車を降りられた陛下はお出迎えの東大会長、清瀬委員長のご案内で、居並ぶ各都道府県選手団総監督にご会釈されながら、スタンド中央席へ、お座席前でギーボルド石川軍政隊長が帽子をとって陛下を迎え、硬い握手とあいさつを交わされた」

なお、来賓祝辞は、ギーボルド石川軍政隊長、文部大臣、石川県知事の順であり、ギーボルドの祝辞全文が新聞にも掲載されている。「全選手諸君に申したいことは誰か勝ち、誰か負けねばならぬことである。競技に最も重要なことはスポーツマンシップである」というものであるが、

終戦直後の戦勝国の軍政隊長が敗戦国の人々に向かってましてや天皇を前にして語るには刺激の強い祝辞である。

また「24競技場の力闘」「とどろくスポーツ賛歌」「力強い選手宣誓」など大きな見出しでも報じている⁽⁴¹⁾。

③国体都市金沢市内の観衆と商店街

この日の金沢市内の様子について、「観衆合わせて8万」として次のように報じている。

「第1日 各競技場巡り」主会場の金沢市は体育大会で沸き立った。市内15か所の会場で行われた10種目の各種競技にどこへ行こうかと戸惑った市民や近県からの観衆は、天皇陛下お成りの金沢市運動場へ4万、兼六園球場へ3万が早朝から詰め掛け、開会式前既に満員、あふれた人々は全身泥まみれになって金沢高師で壮烈な肉弾戦を演じているラグビー会場へ詰めかけていた。

わずか道を隔てた青師では新興スポーツのハンドボールが行われ、郷土代表小松工業の善戦に声援を送った。四高グラウンドのホッケー試合はスティックと派手なストッキングが入り乱れて、狩人がうさぎを追うようにボールを追っていた。スティックが折れてとぶほど活発な試合に、観衆も手に汗を握っていた。

金沢一中の体操競技、金沢市公会堂のエロール・フリン（ハリウッド俳優）の活躍を見るようなフェンシングのオープン・ゲームは案外観衆が少なかった。高岡町中学、石川師範女子部附属コートほか2か所のバスケットボール、兼六園コートほか2か所のバレーボールは沸き返るような人気、得点を挙げるたびに女学生たちが歓声をあげていた。散在する各会場の観衆合わせて1万人あまり。

山岸選手不出場で一抹の寂しさがあった兼六園コートのローン・テニスも美しいスタイルの名流選手がアンツカのコートにラケットの快音を響かせていた。県庁の屋上、公園の坂道には黒山のような無料見物人達がいた。

「今日からボクシング」

第2回国民体育大会ボクシング大会は今日31日午前10時から金石町湊々園競技場で開かれるが、抽選の結果8地域代表の組み合わせは次のとおり決定…（略）

「珍しい競技二つ」

フェンシング アメリカで普及しているフェンシングは日本ではあまりなじみではないためか、会場の金沢市公会堂の観衆はわずか2・30名、金網の面のほか、胸当て、ズボン、くつ下、くつは全部白づくめ、鋼の剣を手にした二人が勝負を決めるスポーツで剣道と似た点が多い。審判員は主審1名、副審5名で、主審が副審の意見をもとめ、多数決で勝負を決める民主的スポーツだ。

スクエアダンス 30日四高講堂で行われた当地方はじめてのスクエアダンスは、4人ずつの男女が1組になり、楽

の音につれ踊る愉快なもの。観覧の進駐軍家族の夫人やお嬢さんも軽快な手拍子よろしく、自然に演ずるもの見るもの一体になる楽しさは、当地の職場や学校にも必ず普及が早いだろう⁽⁴²⁾。

また、金沢市は大会開始とともに、「国体都市」へ変貌、市電増発のほか、タクシーの列、人並みを抜けて走る報道陣の自動車、オートバイ、腕章、バッジが目を引く。商店街はかきいれ時到来とばかりに張り切ったが、駅構内特設マーケットをはじめ、九谷焼、漆器、友禅などは総倒れ、デパートは平日の7～8倍の客だが、売り上げは2倍程度。20～30円程度の小間物類がほとんどで、売り切れは記念バッジとブローチだけ。喫茶店は引き上げ価格で結構繁盛し、映画館もこれに同調。国体で野菜はほぼ一割上がり、魚は現状維持、間たばこは注文殺到で2～3割はあがった。と報じられている⁽⁴³⁾。

④大会4日目の報道

国体4日目、競技も決勝が増えて興味が一段と高まった。前夜からの豪雨で危ぶまれていた天気は、この日は終日晴れたり曇ったり、バレーボールが午前中だけ雨天態勢を取られたほかは順調に行われた。日曜日のため人出も開会式以来の盛況、興味と興奮は曇天を吹き飛ばしていた。陸上競技で最も観客の熱狂を呼んだのは、4メートルのバーをねらう棒高跳の選手たちの超人的な妙技、4万の大観衆は大空に描く肉体の飛翔に心を奪われ、また百メートル決勝に熱狂した。とくに午後2時過ぎ、終戦後日本最高記録を持ってゆうゆうと競技場に姿を現したマラソン選手、福岡の古賀新三選手には全観衆が割れんばかりの拍手を送った。連日名調子で場内アナウンスを続けていたユーモアたっぷりの森田日体学生部長が「古賀選手は39歳で4人の子どものお父さんです」とマイクから紹介すれば、またまた万雷の拍手。テープを切るやいなやどっかとあぐらをかき、大きなリングにかぶりついてスタンドを笑わせた。（略）また石川県の高島選手の生地、河北郡英田村青年団と花園村では激励のアーチまで作って応援したが、同選手は「途中でけいれんを起こしてぶっ倒れ、落胆させた（略）」⁽⁴⁴⁾。

⑤大会最終日

美と力と祖国復興をシンボルとする全日本の陸の祭典第2回国民体育大会は天皇陛下をお迎えした感激をそのまま北陸地方まれにみる快晴の秋空に炬火旗を翻し、ここに5日間1万2千余名の若人が、50万人の大観衆の眼前で、幾多の感激と輝く成果を残して昨3日、馬術競技を最後に5日間にわたる堂々の幕を閉じた。地方開催の試金石石川県大会は見事に成功し、90万県民はいま大きな安心と誇りに

ひたっている。(略)

5日間を通して、金沢市運動場に約15万、兼六園球場に15万、その他金沢市内10数か所の会場合わせて約5万、七尾の相撲場庭球場などに約5万5千で、小松の軟式野球場に約5万、大聖寺の卓球場に1万、合して50万に足らんとする人々が大会を観覧した。

金沢市に落ちた金は一日平均150万円で、計1000万円あまりと見られた。このほか、1万2千人の選手、8百人近い役員が金沢の旅館に支払った金額は6百万円程。金沢市商店会連盟や商工会議所は選手歓迎民謡大会などの歓迎準備に30万円ほど要したが、これは十分採算が取れるものであった。国体後の収支決算報告書も収入596万円あまりに対して支出577万円余りと、差し引き19万円あまりの黒字であった。入場料収入は事務局での概算で競技場300万円、野球場370万円、小松会場50万円、七尾会場20万円、大聖寺会場14万円、その他合わせて約1000万円といわれる。かくて国体の地方進出の最初であった石川県下における第2回国民体育大会は文字通り成功し、明るい祖国復興に貴重な一頁を記録した。⁽⁴⁵⁾

一方、国体景気で釣り上げられた飲食物を中心とする物価高を今後どう処理するか、快晴5日間、スポーツ熱に我を忘れていた市民の表情はちょっと深刻なものがあった。⁽⁴⁶⁾

(10) 学都金沢の大会運営

学都金沢らしく、大会の運営に学生たちが献身的に協力した。松任プールでは夏季大会受付をしていた女子学生たちの見張りが厳重で、特別招待券を持たぬ柴野知事が「一般の方は向こうの入り口です」と断られ、自分が知事であることをいわず、一般入場口へ回れ右をしたとのエピソードも伝えられている。医大、四高、高等師範学校、工専、男女師範、女専、美専などの13校1500名の大半が国体のあらゆる場面に動員された。特に運動部員たちは20数カ所の競技場の審判員、記録員、その他会場の整理員として1200名が配置され、報道特派員の補助員として、200人が記録係や記事写真の連絡員として、三脚を担ぎ、自転車を走らせて活躍したとされている。その他商店と契約して会場付近で地図、大会バッジ、土産物を販売しているものが数百名、中学生50人も新聞社の連絡員として活躍している⁽⁴⁷⁾。

(11) 県外選手団の金沢印象記

国体報告書は、最後に国体選手の金沢印象記（11月6日石川新聞）を載せている。茨城県陸上競技監督は、「山中温泉の宿舎は親切だったが、今日帰りがけに金沢で昼食230円には驚いた。せっかくの親切も後味が悪く、観光都市としての将来に悪印象を残した」とぼったくり商法に苦言を呈した。

またW大生（匿名）は「交通機関は思ったより発達していた。しかしどの電車も満員。バスは貸し切りが多くてフリーが少なかったのは不便だった。体協のバッジなども喫茶店の女の子がつけていても、参加選手役員にはいきわたらなかったし、優勝者に対する表彰が紙1枚免状では金の使い方を誤った感がある。選手よりも観衆本位な点が会場内にもかなり感じられ、興行的な印象を受けた。競技についても古い顔なじみの選手が多く、新人が少なかったのは残念。概して地元のスポーツに対する熱意が足りなかったようだ。選手だけのスポーツではなく、県民全体がスポーツによって結核の汚名をねぎらうべきで、将来立派な競技場に草の生えないよう利用すべきだ」と、スポーツ大会というよりは興行的イベントではないか、それは地元のスポーツに対する理解や熱意がまだまだ不足しているからではないのかと批判的な目を向けた。

北海道旭川市の北島氏は、「次回は北海道で開きたいと考えているので金沢は大変参考になった。非戦災都市で、町や人情は落ち着いているが、北陸線の単線や金沢駅の構え、会場も狭く、大会開催に無理があった。商店など観光面にはもっと明るさが欲しい。喫茶店などももうけ時という感じが強かった。映画館などももっと大きく明るいものがあってもよい。これからのスポーツ普及によってこれも解決されるのでは」との期待と見通しを述べた⁽⁴⁸⁾。

まとめ

(1) 第2回国民体育大会（夏季大会、秋季大会）は金沢市を主会場として石川県内各地で開催された。秋季大会は、天皇臨場のもと、5日間全国から1万2千余名の若人が、50万人の大観衆の眼前で熱戦を繰り広げ、幕を閉じた。地方開催の試金石石川県大会は見事に成功し、翌年からの地方持ち回り開催に結び付いた。

終戦間もない時期のため食糧不足などの理由から反対運動も激しかったが、開催直前の1947年7月には開催が正式決定されて以後、反対運動は霧散した。

(2) 国体開催に伴って、天皇の北陸巡行と国体開会式等への臨場がおこなわれた。石川県内はこの天皇巡行を熱烈に歓迎した。その報道は国体の競技結果報道をはるかにしのぐ。大元帥、現人神とされた帝国憲法下の天皇から、天皇の人間宣言、新憲法での象徴天皇としての位置づけに変わるなど、人々には天皇への接し方に戸惑いが見られたが、天皇が単なる巡幸ではなく国民のスポーツ大会に臨場するという形をとることで新たな天皇像を得たとみることができる。

(3) 地元石川県や金沢市にとってもこの大会の意義は大きい。残された施設の活用、全国の選手が示した競技態度や競技のやり方は石川県民の眼前に全国的なスポーツ情

報を初めて提供する機会となった。大会の準備や施設は必ずしも立派なものばかりではなかったが、敗戦後の困難な状況の中ではよく頑張ったと言えるであろう。ただし交通運輸機関が甚だしく立ち後れているという事実も明らかとなった。

最後に商店と契約して会場付近で販売されたとみられる、国体会場案内を兼ねた地図「大金沢産業案内図」（実

業の石川社、1947年）を掲載しておこう。この地図には石川軍政隊や兼六園庭球コート、兼六園球場、金沢競馬場、金沢市立工業高校（泉野）など、現在は残されていない歴史的な施設が見られる点で極めて貴重である。なおこの地図については大久保英哲「第二回国民体育大会と金沢」⁴⁹⁾参照。

注及び引用・参考文献

- (1) 「国民体育 3日に正式決定」北國毎日新聞、昭和22年7月1日
- (2) 大久保英哲「第2回国民体育大会（1947年石川国体）に関する研究(1)―その構想と準備について―」, 金沢星稜大学人間科学研究, 第13巻1号, 2019, 45-51頁
- (3) 「国民体育 反対の声取るに足らず」北國毎日新聞、昭和22年7月2日
- (4) 「国民体育大会本決まり」, 「大会に寄す」, 「スポーツ」北國毎日新聞、昭和22年7月4日
- (5) 「天皇陛下お成り」, 「お米が来ます 県民代表の懇請で山形や秋田から」, 「機関車にコメの山 鉄道員の闇買い発覚」北國毎日新聞、昭和22年7月18日
- (6) 「県境に検問所 自動車輸送の大口ヤミ摘発へ」北國毎日新聞、昭和22年7月31日
- (7) 「労働単体の集団演技 五千名の大会出場案おこる」北國毎日新聞、昭和22年7月11日
- (8) 「スポーツ講習 金沢、小松、七尾で十八種目」北國毎日新聞、昭和22年7月26日
- (9) 「力自慢は来たれ 重量挙げ・ハンドボールから スポーツ講習始まる」北國毎日新聞、昭和22年8月2日
- (10) 「関西から二百名」, 「水の県代表候補」北國毎日新聞、昭和22年7月31日
- (11) 「金沢駅を改築 国民体育大会を機にもう運動」, 「ありがたい転落 結核全国一の石川県が二三位に」北國毎日新聞、昭和22年7月26日
- (12) 「金沢城の後に北國大学建つ 真宗大谷派で具体化」, 「あす東京裁判再開」北國毎日新聞、昭和22年8月3日
- (13) 「水入れ 松任プール完成」, 「全国民が泳ぎに泳げ 迫る夏季大会に大会記録期待」北國毎日新聞、昭和22年8月15日
- (14) 「精鋭千余の競泳」, 「大会を待つ満水 早くも猛練習する水上石川」北國毎日新聞、昭和22年8月18日
- (15) 「いよいよ明日 国民体育水上大会」, 「東から西から水の猛者」北國毎日新聞、昭和22年8月21日
- (16) 「国体水上大会開く 栄冠目指す一千二百」北國毎日新聞、昭和22年8月22日
- (17) 「第二回国民体育大会夏季大会開幕 全国から若人集めて松任プールに水の祭典拓く」「祝辞」北國毎日新聞、昭和22年8月23日
- (18) 「熱闘3日 93の新記録生む 感激の幕閉ず」北國毎日新聞、昭和22年8月25日
- (19) 「鮮やかタックル 国体に備えてラグビー練習」北國毎日新聞、昭和22年9月7日
- (20) 「国体テニスコート」北國毎日新聞、昭和22年10月13日
- (21) 「金沢城を公園化す レクリエーション運動場実現へ」北國毎日新聞、昭和22年9月29日
- (22) 「国民体育 臨時ダイヤ 国鉄の総力を総動員して当たる」北國毎日新聞、昭和22年10月19日
- (23) 「スポーツと医学」, 「社会生活とスポーツ」北國毎日新聞、昭和22年10月21日
- (24) 「国体を全国中継 五日間のプロ決まる」北國毎日新聞、昭和22年10月23日
- (25) 「完成したボクシング・リング」北國毎日新聞、昭和22年10月26日
- (26) 「10月石川県会 追加予算五千余円可決」北國毎日新聞、昭和22年10月19日
- (27) 「天皇陛下御来県日程 丸三日間の巡幸」北國毎日新聞、昭和22年10月21日
- (28) 「国旗は揚げぬよう 陛下お迎えの県民心得帳」北國毎日新聞、昭和22年10月24日
- (29) 「天皇・北陸地へ お成り待つ県下の表情 お写真も街に」北國毎日新聞、昭和22年10月24日
- (30) 「天皇陛下 北陸路へお成り 昨夜敦賀に御着」北國毎日新聞、昭和22年10月24日
- (31) 「越路に迎えた天皇陛下 明日石川県へ」北國毎日新聞、昭和22年10月25日
- (32) 「陛下きょう御来県 まず橋立漁港、山中病院等をご視察、県民、心からおむかえ」, 「社説」北國毎日新聞、昭和22年10月26日。なお大正13年摂政官として来県された折の経緯については、大久保英哲「第7節 大正期の教育課題」, 金沢市史・通史編3, 近代, 平成18年, 424-438頁, 参照
- (33) 「山中温泉で来県第一夜 二度も提灯持ってお応え 山中三千町民熱狂の提灯行列」北國毎日新聞、昭和22年10月27日
- (34) 「お憩いの一日 ひょうひょうと陛下 雨の山峡を一里」北國毎日新聞、昭和22年10月28日
- (35) 「国民体育 選手ら乗り込む 昨日北と南から千八百余名」北國毎日新聞、昭和22年10月27日
- (36) 「秋晴れの空に歓呼どよもす 涙の大歓呼 あっお顔だ」北國毎日新聞、昭和22年10月29日
- (37) 「加賀から能登へ 温顔に万歳の連発 巡幸第三日」北國毎日新聞、昭和22年10月29日
- (38) 「赤き火は行く 夜の金沢をいろどる提灯行列」北國毎日

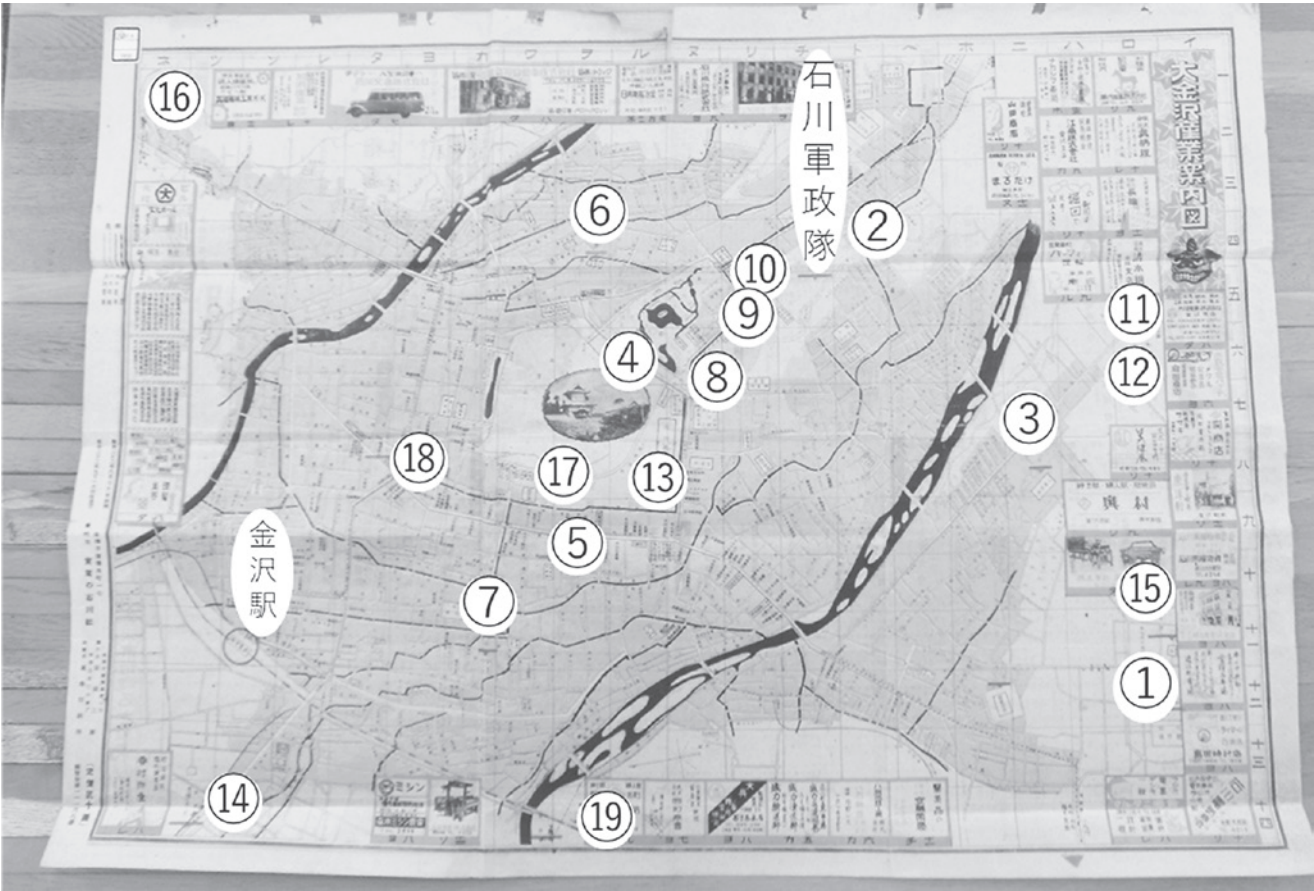
新聞，昭和22年10月30日

- (39) 「この日の陛下 尽きぬお名残り」北國毎日新聞，昭和22年10月31日
- (40) 「国民体育 あすぞ競う若人 すでに大会気分街にみなぎる」北國毎日新聞，昭和22年10月29日
- (41) 「陛下を迎えて第二回国民体育大会開く昨日秋晴れのもと全国の若人一万二千名参加して金沢運動場空前の開会式典」北國毎日新聞，昭和22年10月31日（国会図書館蔵使用）
- (42) 「観衆合わせて八万 第一日 各競技場めぐり」北國毎日新聞，昭和22年10月31日
- (43) 「国体都市かなざわ第二日雑感」北國毎日新聞，昭和22年11月1日
- (44) 「妙技続出・大会大詰めへ」北國毎日新聞，昭和22年11月

3日

- (45) 「第二回国民体育 最終日 輝く成果おさめて大会旗静かに降る 陸上3日間に新記録22」北國毎日新聞，昭和22年11月4日
- (46) 「人出も戦後新記録 一週間に落ちたお金が一千万円」北國毎日新聞，昭和22年11月4日
- (47) 大久保英哲「第5節 復興と第二回国民体育大会」金沢市史・通史編3，近代，平成18年，676-677頁参照。また「学徒千五百動員」北國毎日新聞，昭和22年11月1日
- (48) 第二回国民体育大会石川県準備委員会「第二回国民体育大会報告書」昭和22年12月，112頁
- (49) 大久保英哲「第二回国民体育大会と金沢」，本康宏史（編著）『古地図で楽しむ金沢』，風媒社，2017

大金沢産業案内図（実業の石川社，1947年）



（金沢市立玉川図書館蔵）

第2回国民体育大会（石川国体）金沢市内競技場・日程表（冬季大会、金沢市以外を除く）○は屋外、■は屋内													
地図上 番号	会場	当時の住所	2021 現在	陸上	野球	軟式 野球 （小松市）	軟式 庭球 （七尾市）	バスケット ボール	ハンド ボール	ラグビー	サッカー	バレー ボール	卓球 （大聖寺でも）
1	金沢市運動場（公設運動場）	金沢市富樫町	金沢市弥生3丁目 金沢市陸上競技場	○									
2	兼六園野球場（出羽町球場）	（金沢市出羽町）旧陸軍出羽町練兵場	出羽町、北陸電力 本多の森ホール		○							○	
3	金沢市立工業学校野球場	金沢市泉野町	住宅地		○		○						
4	兼六園庭球場（県庁裏コート）	金沢市宮守堀通	金沢城公園 いもり堀			○						○	
5	高岡町中学校	金沢市高岡町	金沢市文化ホール						■				
6	小待町中学校	金沢市小待町	金沢市立小待町中学校						■				
7	県立第一高等女学校	金沢市穴水町	金沢市長土堀 穴水児童公園（一部）						■				
8	石川師範学校女子部附属小学校	金沢市広坂通	金沢21世紀美術館						■				
9	金沢女子専門学園	（金沢市出羽町）旧陸軍兵器庫	石川県立歴史博物館									○	○
10	金沢美術工芸専門学校	（金沢市出羽町）旧陸軍兵器庫	石川県立歴史博物館										
11	金沢高等師範学校	（金沢史野田町）旧金沢特科隊跡地	金沢大学附属学校						○	○			
12	金沢青年師範学校	金沢史野田町）旧金沢特科隊跡地	金沢大学附属学校						○	○			
13	第四高等学校	金沢市広坂通	いしかわ四高記念公園								○		
14	清々園内	金沢市金石町										○	
15	県立第一中学校	金沢市泉野出町	石川県立金沢泉丘高校										■
16	県立第三中学校	金沢市大樋町	石川県立金沢桜丘高校										○
17	金沢市公会堂	金沢市尾山町	石川県文教会館										■
18	むさし大和 文化ホール	金沢市袋町	ル・キューブ金沢										■
19	金沢競馬場	金沢市中村町	金沢競馬場										
日程	10月30日（木）				○	○	○	○	○	○	○	○	○
	10月31日（金）				○	○	○	○	○	○	○	○	○
	11月1日（土）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	11月2日（日）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	11月3日（月）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
「第二回国民体育大会報告書」、「第二回国民体育大会競技場・日程表」（第2回国民体育大会記念 大会会場附 大金沢市街・産業案内図）を元に筆者作成													